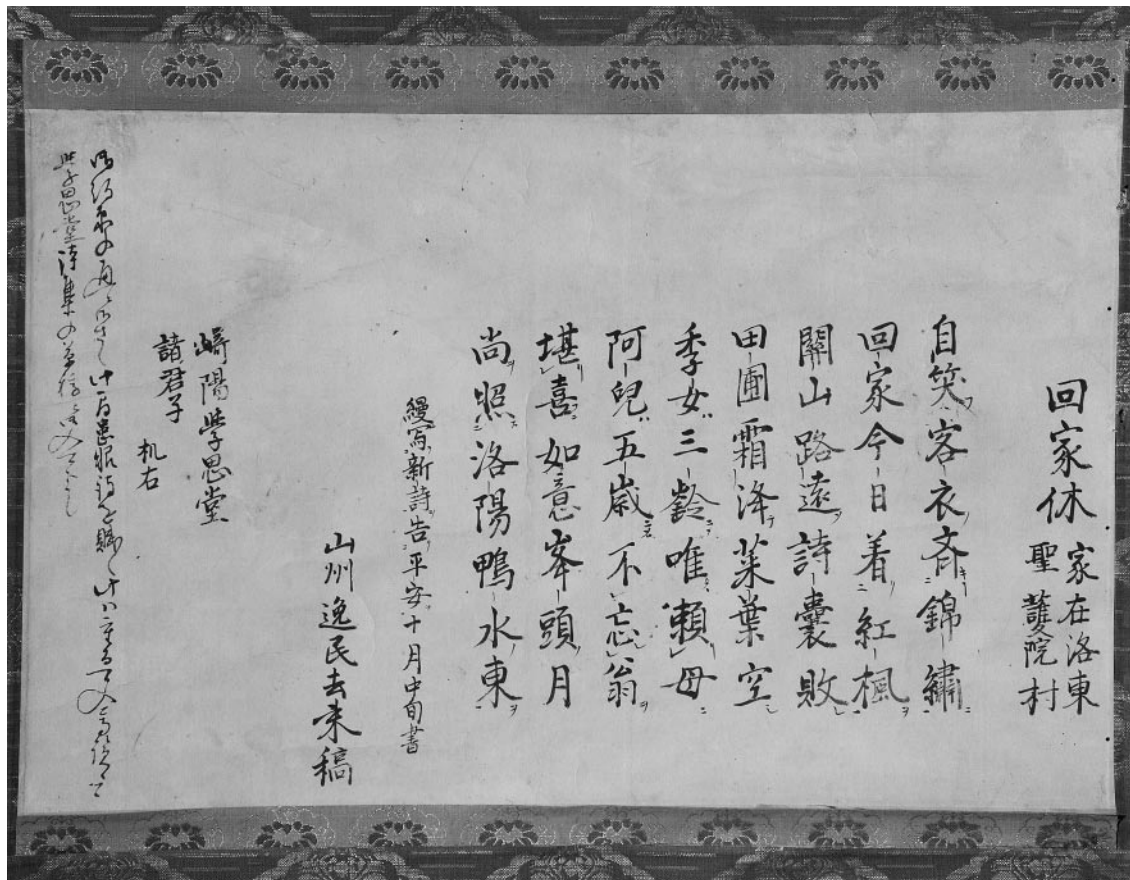


元禄十二年十月中旬 学思堂宛去来書簡

宮脇 真彦（教育・総合科学学術院教授）



〈翻刻〉

回家休

家在洛東  
聖護院村

自笑客衣齊錦繡

回家今日着紅楓

關山路遠詩囊敗

田圃霜降菜葉空

季女三齡唯賴母

阿兒五歲不忘翁

堪喜如意峯頭月

尚照洛陽鴨水東

縵寫新詩告平安 十月中旬書

山州逸民去来稿

崎陽學思堂

諸君子

机右

御約束の通二御さ候。此間患眼詩を賦候。此ハ重而可入高覧候間、學思堂詩集の草稿二御入可被下候。

向井去来は、元禄時代の俳人。宝永元年（1704）9月10日没。54歳。貞享初年頃（1684）から松尾芭蕉に師事して、同じく蕉門の野沢凡兆とともに『猿蓑』（元禄4年刊）の編者となり、蕉門の高弟として芭蕉の信頼が篤かった。元禄七年（1694）に芭蕉が没して後は、『有磯海』『となみ山』の編集を扶け、また卯七（義理の従兄弟）と『渡鳥集』を共編するのみならず、芭蕉の俳諧の真髓を後世に伝えるべく、いくつかの俳論書を表した。芭蕉の言説を伝えるものとして著名な『去来抄』（稿本）は、その集大成である。

去来は、肥前長崎の儒医向井元升の次男として、長崎に生まれた。なお、三男、向井元成（俳号、魯町）は延宝8年（1680）、父元升の創建した長崎聖堂の祭主となり、貞享二年、舶載の書中に禁書を発見、その功をもって代々輸入書籍の書物改めの職を世襲したという。

本書簡が元禄十二年と推定されるのは、去来が長崎への旅から帰京しての所懐を述べているところからである。すなわち、去来は前年の6月下旬、郷里長崎への旅に出立する。これは、4ヶ月ほど前に16歳で亡くなった甥守寿（英俊）の新盆を長崎で行うためだったろうと推測されている。英俊は、去来の猶子であった。この故郷への旅で、去来は長崎に1年3ヶ月ほど滞在、元禄十二年十月に京都の自宅に帰っている。「十月下旬」の日付をもつ本書簡は、帰宅後まもなく、郷里の長崎に宛てて出されたものである。

本書簡は、「回家休」と題された七言律詩を、長崎「学思堂」の人々に寄稿したものである。宛先の学思堂は、おそらく去来の弟元成の学塾であろう。尚々書きに「御約束の通ニ御ざ候」とあり、また、「此間、患眼詩を賦候、此ハ重而可入高覧候」とあることから、長崎滞在中に約束しての作であったことがわかる。また、別に「患眼詩」なる詩を送る旨書かれているが、こちらはその書簡が伝存していない。「学思堂詩集の草稿ニ御入可被下候」と結んでいるので、学思堂では『学思堂詩集』なる漢詩集編纂の予定があり、それに入集せしめんと約束であったにちがいない。残念ながら、その詩集は確認することが出来ない。

試みに詩を書き下しにして、おおよその意味を解しておこう。

自ら笑ふ 客衣 錦繡に斉しきことを  
回家 今日 紅楓に着く  
関山 路遠くして詩囊敗れ  
田圃 霜降りて菜葉空し  
季女は三齡にして唯母に頼り  
阿兒は五歳にして翁を忘れず  
喜ぶに堪へず如意 峯頭の月  
尚 洛陽 鴨水の東を照らす

旅衣はあちこち破れてまるで錦の綴れのように（錦を飾るなどと洒落てみてもしようがない）。帰ってきた我が家は、今、真っ赤に紅葉した楓が覆って美しい（まさに錦秋）。故郷への遠い旅路で我が詩心は尽きてしまい、田畑には霜が降りて菜の葉もみな枯れている。末の娘は三歳でただただ母に頼り切っているだけだが、上の娘は五歳で、この翁の私を忘れずにいてくれた。喜びに堪えないことだ、この如意が岳の上にかかる月をみれば。今なお、京の鴨川の東の我が家のある辺りを明るく照らしていることだ—、という意味になろうか。長旅から帰っての、家族に接した喜びに溢れている詩である。当時去来は49歳。家族は、5歳の長女登美、3歳の次女多美、妻可南女がいた。

去来の業績を集めた『去来先生全集』（落柿舎保存会刊、昭和57）に、本書簡は考証を付して掲載されている。ただし、編纂時には原物がなく、旧蔵者初山梓月編『俳諧古典集』所載の写真によって収められた。その原物が出現したことを喜びたい。なお、上記の解説は、すべてこれらによって記したものであることを断っておく。

＊

昨年五月、故雲英末雄先生ゆかりの鎌倉の古美術商に、去来の漢詩が出ていると教えてくださり、わざわざそこに案内して下さったのは、雲英先生の教え子である伊藤善隆氏であった。その古美術商から、雲英先生が毎月2度は鎌倉を散策された序でに寄られていたことや、年末には毎年、伊藤氏など教え子の数人と一緒に見えられたことなど、いろんな話をうかがった。

本書簡は、その古美術商に初山梓月旧蔵のものがまとまって入ったなかの残りの一つだった。

鎌倉からの帰り、今度は伊藤氏が、雲英先生との思い出をずっと話されていたのが、とても印象的だった。